

〔藩翰譜本十一〕坂崎出羽守が上を恨みまゐらす事ありて、己が宿所に楯籠りし時に、執政の人々相議り、坂崎がおとなが許に奉書下して、汝等が主、違犯の罪逃るべからず、汝もし汝が主の家絶えざらん事を思はゞ、汝が主勸めて自害させよ、さあらんに於ては、汝が主の世嗣立て給ふべき由を下知すべしと議定す、其時上野介正純本多人々に向ひ、誠に彼のおとなが、主人に腹切らせたらんには、かの家立てさせ給ふべきやと問ふ、人々いかで謀反人の家は立て給ふべきやと答ふ、正純聞て、さらば此奉書下されん事然るべからず、かの不臣を罪せんが爲に、又かの臣に不臣を勸め給ふ事、天下の下知に在るべき事とも覺えず、且は天下の政事は、信ならずんばあるべからず、只速に軍勢を差向けて誅伐あるべきものなり、何ぞ苟くも、人臣の教とすべからざる事を陳べて偽を行ひ、天下の風俗を亂り給ふべきと云ひしかど、衆議一決せしかば、さらば正純は連署叶ふべからずとて、署を加へざりき、正純が他事は如何にもあれ、此一言は天下の名言なりといふべしやと、柳生但馬守宗矩常に感せられしなり、誠に此一言を以て見るに、此人の若き時より、大御所の御覚えよかりしも宜なるにや、又同職の人と其の間の不快なりしも推て知られ侍る、〔常山紀談十四〕古田助左衛門は古田兵部少輔重勝に仕へて、祿千石を受く、景勝を征伐の時、重勝伊勢の松坂の城に助左衛門を置れけり、中重勝も東國より歸り來り、松坂にたて籠る、此時富田信濃守信高、阿濃津を守られしが、加勢を重勝に乞ふ、兵を分ちやるべき體のなかりければ、助左衛門阿濃津へ加勢あらん事、尤望む所なり、中と勸めて、五百人の軍兵を阿濃津にやりけり、やがて重勝の領知の百姓の中に、大家なる者二十人を士として、城にこもらせ、後に百石の地をあたふべしと約しけり、是人質の心にて、百姓をさわがせじとの術なり、關ヶ原の亂治りて、後重勝約に背んとせられしかば、助左衛門信を失ふは君の道にあらずか、る言葉は金石よりも堅くすべき事なり、是より後又欺んとて、百姓ども何事も聞き入れ候はじ、信なくば立すと申事の